



**竜を斬る女侍も
肉刀には敵わない**

挿絵四枚全101Pのノベル作品

「体験版short.ver」

目次

第一話	女侍、依頼で仲間と共に巨竜を斬り伏せる	3
第二話	触手に変えられる肉釣り鐘、破られる処女膜	11
第三話	卑劣騎士団長に飼い馴らされていく女体と心	39
最終話	女侍、心の底から屈服し、牝侍宣言をする	63 (体験版未収録)
ご挨拶		101 (63)

主な登場人物

リンコ 二十歳ほどの女侍。『絶対斬姫』の異名をとり、傭兵として活躍している。

ガラル 中年の王国騎士団長。酒樽腹だが能力は確か。巨根で絶倫。

く。 たった三人の人間の女を睨みつける瞳は憎悪に燃え上がっているのに、動きが緩慢なのは、相手を痺れさせると言うクレリックの魔法の効果が現れている証左に違いない。

「わお！ 効いてる、効いてるよソフィアお姉ちゃん！ あっ、今前足ついた！」

「ふたりともよくやってくれた。かたじけない。君たちが仲間で本当に拙者は幸せでござる……………受けるがいい名もなきドラゴンよ。天誅を、王の裁きを！ ……………森羅斬壊
ツツツ！」

腰を低くし、やや前傾姿勢に構えながら、愛刀の柄を握り締める。

ドラゴンと対峙する以前から密かに練っていた体内のエネルギーを、鞘の中の刀身に一瞬で注入すると、目にも留まらぬ速さで抜き放った。

シャラララララララ！

腰で円を描く抜刀は、緑の燐光纏う刀身にも円の軌跡を描かせた。

刀身の軌跡はエネルギーの刃となり、膝をつく竜に襲いかかる。

ズバァンンンンンンン！ ズシィィィィンンンン！

宙に舞った竜の首が落ち、重く響く轟音と共に大地が揺れる。

背後では首元を除けば傷一つない、赤い鱗の巨体が地面に突っ伏していた。

目を見開いた首も、胴体も少しの間痙攣していたがやがて動かなくなる。

「……………往生を願う」

緊張を解き、瞑目するリンコ。



人間に害をなしたモンスターだが、死後も不幸になっていいとは思わない。

あどけない女魔法使い リアはガッツポーズをとっているが、清楚な女クレリック

ソフィアは冥福の祈りを捧げていた。心優しい彼女も同じ気持ちだろう。

「さて、依頼は果たした。王都に戻りガラル卿へ報告しよう」

「めんどいねー。あたしたち、誰もできなかったことをしたんだから、あっちから来ればいいのに」

「ガラル卿は王国騎士団長。傭兵のわたくしたちのために、足を運ぶなどありえませんわ」
ソフィアが姉のような顔で言うが、リアは頬を膨らませた。

「そりゃそうだけどさー。依頼料がやつすい上に、あたしらが溜めてたマジックアイテムを全部使ったつてのに、それじゃ誠意くない？ あ、別に今回の仕事が嫌だったわけじゃないんだよ？」

持ち前の博愛精神から今回の仕事を強く望んだソフィアに、念押しする風に見詰めるリア。女クレリックはわかっていますわと言わんばかりにしつとりと微笑んだ。

「言っても詮無きことだ。相手は国の首脳なのだから。それより、早く人里に下りて食事と休息をとるうではないか。拙者、もう腹と背がくっついてしまいそうぞ」

装備の下に仕込んでいた能力強化のマジックアイテムの数々が力をなくしていることを感じつつ、刀を鞘に収めるリンコ。ふたりを見ると、同意するように笑っていた。

「あはは、実はあたしもペッコペコ。力を使い果たしちゃったもん」

「恥ずかしながらわたくしも…… 天気が崩れないうちに参りましょう」
三人はドラゴンとの戦いの場を後にする。

遠くの空に立ちこめ始めた黒雲が、女たちを追うようにゆっくり流れてきていた。

「え、それって出世ってこと？」

ドラゴン退治から数日後。

王都の王城に入ったリンコ、ソフィア、リアの三人は、王国騎士団長ガラルの執務室を訪ねていた。

陽光注ぐ長窓を背中に執務机に座るのは、四十代の男だ。

禿げた頭頂、豚のように丸い頬、酒樽じみた太い体型をしているが、青い瞳はキラツ
8
いている。視界に収まるものすべてを注視して、自分の利益になりそうな物事を見逃さない、そんな注意深くて抜け目のない目であった。

「平たく言えばそうだな」

椅子に深く腰掛けるガラルが、鷹揚に頷いた。

依頼完遂を受けた騎士団長は、聞き直すリアに眉を上げたが、それ以上のことはせず、上に立つ者らしい威厳のある声で、先ほどのことを繰り返す。

「ソフィアは王立療養院の第三位白師、リアに『魔術の滝』の第五位導師、リンコには王立騎士団副団長、つまり俺の副官の地位が打診されている」

「すごいですわ……普通なら、優秀な方が数十年かけても至れるかどうかという地位ですのに、わたくしたちのような二十歳程度の、しかも女性にお話をいただけるなど」

ソフィアが嘆息する。他に誰も喋らないでいると、ガラルが沈黙を破った。

「君らはもうただの傭兵ではない。三英雄、三女神。これまであげた数々の武勲を称える声は相当のものだ。おまけにドラゴンスレイヤーの称号の追加だ。ソフィアの言う通り冗談みたいな話だが、君たちならば別……さて、どうする？ 返答を聞かせてもらおう。俺が窓口になっていてね。方々に報告せねばならんのだ」

ガラルの言葉に三人は目配せをした。

リアは肩をすくめ、ソフィアは柔らかく微笑む。

ふたりに向かって軽く頷くリンコ。

少し待っても態度が変わらないのを見届けると、形のいい桜色の唇を開く。

「拙者たちは根無し草のただの傭兵。分不相応の地位をいただくわけには参りません」

遠回しの辞退だった。

王国騎士団長は三人を順に見回す。三人全員が、真正面から見返す。目を逸らさないのは、翻意しない意志の表示だと彼も気づいたのだらう。了解したとでも言つように鼻を鳴らし、話題を変えた。

「次の仕事だ。君たちには邪悪な魔導師を退治してもらいたい」

いつもの調子で依頼内容を話し出す様子は、仕事に不必要なことを一切持ち出さない役

人的な姿であった。

第二話 触手に変えられる肉釣り鐘 破られる処女膜

「なんかさあ、腑に落ちないよねえ」

数日後、王国騎士団長の依頼を受けた一行は、最奥にいますという討伐対象の魔導師を指し、洞窟の中を歩いていた。

横幅は大人数人がラクに並べる広さで、天井も二階建て家屋の屋根ほどはある。

ヒカリゴケが生い茂り、淡く光っているのでカンテラはいらなかった。両腕が自由なのはありがたいものの、やや肌寒いのに難儀する。時折奥から吹いてくる冷えた風にうなじが舐められると、ゾクリと背中が粟立ってしまう。

「ガラル卿のことでしょうか」

腕白な子供みたいに頭の後ろで手を組んで呟くリアをソフィアが見る。

「うんうん。あたしたちがあのお話を蹴るってことは、破格の採用内定の窓口であるところの酒樽豚顔さんに泥を塗ることと等号で結べるじゃない？ なのに、あいつちつとも怒らなかつたし考え直せとも言わなかつたでしょー。なに考えてんだか」

「そうですね……ですが、怒られたり迫られたりしない方がよいではないですか」

「ともあれ、拙者たちはもうこの国にいられないな。今回がこの国における最後の仕事とするべきだろう」

ふたりの会話にリンコが口を挟むと、リアもソフィアも頷いた。

打診があつた機関はどちらも王が作った組織。つきつめれば、就職を拒否することは王命に背くことに近い。

加えて名声だ。ガラルは優秀な者を迎え入れる風な口振りで内定を告げてきたが、身分不相応の人気を得た傭兵を国のシステムに組み込んで利用したがつていと見るのが妥当だろう。王国に属さない名望家など邪魔でしかない。これ以上留まっていたら暗殺されてもおかしくない。

「だよね。さて、じゃあ夜逃げ先はどこにするお姉ちゃんたち」

「困っている方が大勢いる土地がいいですわね」

「拙者はふたりに任せる。ふたりとならば、どんな土地でも楽しく過ごせるであろうから」

「そだね。あたしもまだまだソフィアお姉ちゃんとリンコお姉ちゃんと一緒にいたい！」

「わたくしもです。皆さんと知り合い、仲間になれて、こうしていられるのは幸せです。国を追われようとも」

ほどなくして、一行は洞窟の最奥にたどり着いた。

大きな館を建てられそうな広い空間の一番奥には、座り込んで巻物を読んでいる老人がいた。風が吹けば飛び散ってしまいそうなボロボロのローブを纏う、枯れ木のように痩せた老人だ。

コキコキと肩をならした拍子にこちらを見つけ、指を指した後、おもむろに叫ぶ。

「む、来おったか！ これを食らえ！」

本を放り出しながら立ち上がり、早口で呪文を唱え始めた。ソフィアとリンコが構える中、リアは普段の悪戯っぽい目を鋭くして老人の呪文詠唱を聞いていたが、すぐに鼻を鳴らした。

「ハッ、なにそれ。初級の火炎魔法じゃないの。そんなの、発動した後でも軽かわせるつての。あゝあ、悪の魔導師つていうからどんな奴かと期待してたら拍子抜け」

ブオオオオツ！

詠唱を終えた刹那、老魔導師は汚く笑った。

こちらに突きだしていた手を、素早く天井に向ける。

「へ？」

リアの間の抜けた声を無視して放たれた火炎は、ヒカリゴケが生えていないせいで暗くなっていた一角に突き進む。

リンコらの頭上だった。炎の筋が目指す先には、一抱えあるカゴが下がっている。

炎の筋はカゴの底に着弾し、全体を瞬く間に焼き尽くした。

「なにやって……………キヤアアアアア！」

ボドボドボドボドドドドド！

燃える籠から、次々と何かが降ってくる。

半透明の液体の固まりだった。緑色で粘度の高いそれは、三人の女傑の身体に着地して、

うねうねと小さく身震いする。

「なんですかこれは！ いやです、気持ち悪いっ！」

上品な美声を悲鳴に変えるソフィア。焦った様子で身をよじり、でたらめに手足を振るものの、衣服の上から張り付く粘液の固まりは少しも取れない。

「コイツ……く、斬れないぞ………！」

地面に落下するやこちらに飛びついてきた固まりを、愛刀で切り刻むリンコだったが、効果はない。分裂するかすぐに元に戻って身体にへばりつくのだ。

（く、おかしい………身体から力が抜ける！）

諦めずに刀を振るっていると、息が切れてくる。身体も急速に重くなっていく。疲労したときの症状だ。数度刀を振るっただけでこれほど疲れるというのは明らかにおかしい。

「クハハハハハ！ 見たか、それこそが『スライム』、長き年月をかけてわしが蘇らせた古のモンスターだ！ 物理攻撃にはほぼ無敵。魔法への耐性も強化しておる。そうそう倒せはせんぞ。もっとも、そいつらは依頼を受けて品種改良した派生品で、他にも面白い機能を備えておるがの」

「はあ………はあ………なんだと？ まさか………っ」

「そうじゃ。纏わり付いた相手から力を吸い取るのだ。そしてもうひとつ………」

老人が大爆笑する中、鉄板に注いだ水が蒸発するような音が木霊した。

ジュワァッ、ジュワワワァッ……。

「うそでしょ、服が溶けてるうッ!」

スライムが張り付いている部分が、白い蒸気となって消えていく。恐怖に顔を引きつらせるリアだけでなく、ソフィアとリンコの衣類も溶け始め、斑模様が大きくなっていく。

「心配するな。浸食は布地だけ。肌には害はない。とはいえ、相手が布なら魔法防御の施された物でも溶けるがの………ククク、ドラゴンスレイヤー三人の若い女神は、容姿も身体も絶品じゃのお。忘れていた肉欲がムラムラ湧いてくるわい」

身の安全を確信したのだろう。奥にいた魔導師は緊張感のない足取りで近づいてくる。ウヒヒという下卑た笑いは、バカにしているとも無防備な美女たちに相好を崩しているともつかない。

石床に仰向けに倒れ込み、スライムに翻弄される自分たち三人から目を離さない。

リアの未成熟な、けれど一番肌艶のいい生白い半裸が。

最も豊満で、しかし若娘らしくメリハリのあるソフィアのあられもない姿が。

緞帳のように重々しい前鎧と着物の見頃はだけたリンコの胸元が。

普段ならば誰も見ることはない艶めかしい女体が鑑賞物になってしまっている。

「下衆が! 婦女子の素肌を見るんじゃない!」

倒しにかかるのならばまだしも、服を溶かして辱めるといふ卑劣な行為は許し難い。激高したリンコが睨みつける。



しかし、身体から力が抜けるのでは、刀を取りこぼさないよう握りしめているだけで精一杯。切りかかることなどできやしない。

「ヒィッヒッヒ！ 威勢がいいのお。どこまで持つかな」

気味悪く哄笑した老人が、新しい魔法を唱えた。

すると、壁に取り付けられていた複数のドアの一つが勢いよく開いた。

「なにあれミミズの化け物っ！ 冗談じゃないわよこんなときに！」

「あれはミミズの化け物というよりも……」

ウネウネウネ……グジュグジュジュジュ……。

出てきたのは紫色の触手だ。一匹や二匹ではない。数え切れない位にいる。

姿はリアの言う通り、ミミズ系の環状生物のそれだった。太さは子供の腕程度。表面

に浮く大小無数の血管がドクドク脈打つ様子は強い生命力を感じさせ、異様な迫力を醸している。

「このスライムのようにヌメヌメしているぞ……！」

加えて、油で濡れている風に全身が照り光っている。石床にどんなに這い後をつけても身体が乾いていないのが、体内から噴出している証拠だろう。触手どもは体外に粘液を出すタイプなのだ。

「く、くるなあっ、この……ああ、だめ、魔法が発動しない！ こんな雑魚っぽい奴、あたしの魔法なら一発なのに！」

「拙者も身体に力が入らない……クツ、先にこいつらが出ていたら、残らず斬れたに違いないというのに……ソフィア、君も魔法はだめなのか……！」

「わたくしも……はあ、はあ、先ほどから試みてはいたのですが、あああっ」

最後の悲鳴は、素肌の露出が広がっていくことへの悲嘆だろう。優しさ以上に憤み深い性格をしていて、一定以上の露出を好まない彼女にとっては、今の状況は相当苦しいはず。

「ウヒツ！ 露出するオツパイを恥ずかしがりながら必死に隠そうとする美女は最高じゃない……所詮、人間は一度に複数のことを意識することはできん。羞恥で心が一杯になれば、抵抗しようという気持ちは代わりに引っ込む。その間、力は奪われる。我ながら完璧な作戦じゃあー！」

（そこまで計算してのスライム攻撃か……だが、あの気色の悪い触手で何をしようと言っただけ……絞め殺すつもりなのか？）

もがきながら訝しんでいると、肉紐の群が三手に分かれた。

自分、ソフィア、リアに向かって蛇のように接近してくる。

スライムが入れ違いで離れていくのは有り難いが、ほとんど裸にされた後、新しい脅威が近づいてくるのでは意味もない。

「くうっ、離れるー！」

足の装備が残らず溶かされ、裸になってしまったリンコの生足に絡みついてきた。

螺旋状に巻き付き、戦う女の太めの太股を締めるとは弛むという動作を仕掛けてくる。

(絞め殺すのではないのか？ これは……まるで太股を揉まれている風だ)

粘液塗れの触手の肌は生白い肌に吸い付いてくる。絞められ、解放されるといふ愛撫じみた所作には痛苦を感じさせられることはないのだが、代わりに甘い痺れが起こる。

(妙な気分になってくる……)

人肌の感触と体温を持つ触手に揉まれているのは視覚的に気持ちのいいものではない。頭ではそうお思うのだが、繰り返されていく内に、太股が心地よく火照ってくる。周囲の気温が低めなのが奇妙な心地よさを際立たせていた。

(つく、反対の足にまで……)

片足に気を取られていると、別の触手がもう片方の足に絡みついた。反対側の太股を揉んでいる個体のように、こちらも愛撫する風に蠢き始める。

「はあ……………はあ……………この感じは……………」

太股に感じさせられる仄かに甘い痺れは、あられもなく露出している股間を目覚めさせているのかも知れない。触れてもいない女の部分は、じんわりと熱持ち、太股よりももっと濃厚な甘い痺れに見舞われている。

「ほう、『絶対斬姫』、『クールブレイド』、『ドラゴンスレイヤー』の異名を持つ女侍のリンコはどつやら処女のようじゃな。まったく、セックスの痕跡のない、綺麗なオマンコじゃわい」

スライムと触手によって崩されていたせいで、着物はまるでスカートがめくれたよう。

触手に引つ張られて大きく開かれた胴底には、誰もみたことのない女侍の裸の秘園が現れている。身じろぎする風に、ゆっくり小さく振幅し始めていた。

剥きたてのゆで卵みたいにツルリとしている無毛の股間は、誰が見ても同じ風に言つかも知れない。

実際、リンコは処女だったし、必要な時以外は触れたことのなかった。

「み、見るなあっ……！」

睨みながら叫ぶが、老魔導師はニタニタと笑うだけ。一向に目をそらさない。

「こんな可愛らしくて魅力的なオマンコはいつまでだって見ていたいぞ。『絶対斬姫』のオマンコなら、尚更じゃ。男なら誰だってそうする。わしだってそうするぞい」

(こいつの目を潰してやりたい！)

心の底から憤怒が湧いてくるが、全身が脱力してなすすべがない。愛刀を落とさないようにするだけで精一杯だった。

(身体が重い……怠くて仕方がない……ただ仰向けになっているだけでなんとという疲労感だ……あぁっ、足が……太股にまた)

「はあ、はあ……なんなのだこれは……こんな感覚は……」

心臓の動悸が激しくなっていく。ドクドクという振動は身体が揺すぶられている風に強いのだが、不快感がない。

(わ、悪くないだと……太股や股間みたいに胸の奥も……心地よい、だなど)

透明の粘液でぐしょ濡れになった太股や股間だけでなく、胸元にも甘い痺れが広がって、呼吸まで甘ったるくなってくる。

(おかしい……拙者の身体……おかしくなっているぞ)

修練や戦いで身体を動かしている時も体温は上がり鼓動が速まる。

しかし、同時に妖しい甘みを肉に感じるなど経験がない。

初めて体験する不思議な感覚に、どう対処すればいいのか戸惑っていると、新しい触手が胸元に飛びついてきた。

「はあううあああつ！ し、しまった………うふうあ、む、胸に……っ」

片方だけでなく、もう片方の乳房にも他の触手が飛びかかり、とぐるを巻く。

「離れる触手、う、あああつ……胸まで………ああ……う」

裸になっても真正面に突き出ている、まるで横倒しした釣り鐘のような豊胸に、触手が螺旋状に絡みつき、太股にしている風に締まったり弛んだりを繰り返す。

「ヒヒヒ、巨乳が触手に締められ肉をはみ出させるのも、元に戻っても触手が巻き付いたままなのも、興奮を誘ういい絵じゃわい」

(はああ……こんな奴に見られているのに………胸までおかしくなっている)

太股と女性器に居座る甘い痺れと同種の感覚が、乳房も覆おうとしていた。

ぬるつく肉の身体でグイグイしめられると、乳房の芯からポツと熱くなる。太股や女性器の肉を溶かすかのような、妖しい痺れも起こっていた。

ふつと力を抜かれて、ほとんど全方位から加えられていた強い圧迫感から解放されると、小さな喘ぎ声混じりの溜息が出てしまつ。

溜息も喘ぎ声も、出したことがないほど酷く湿っぽく、音程が高かつた。女侍ではなく、商売女に似合う吐息と声に、驚きを羞恥をかき立てられる。

シユルルル……シユルルルル……。

人形のように脱力している身体が、触手によって動かされる。

亀のように手足をばたつかせたものの、肉紐の力の方が強かつた。こちらの抵抗を意に介さず、何事もなかつたかのように思い通りに動く。

「拙者はなんとという格好を……ぐっ……ふんっ、駄目だ、力が入らない……」

とらされたのは、乳房を下敷きにする四つん這いの体勢。

着物は腰から背中にくくりあがり、白く豊かな尻タブが突き出ていた。

女性器同様、誰にも見せたことのない、縦皺多めの小さな肛門がひんやりした空気と直に触れあっている。

会陰を挟んだ向こう側にある陰唇も、肛門と一緒に見れる位置に来ていた。

「これが『絶対斬姫』の肛門か……黒ずみがほとんどない、オマンコと比べても綺麗でいやらしい見た目をしておるなあ」

後ろに回つた老魔導師が息を吹きかけてきた。

「ひいあああっ！」

温かくて湿った空気の流れに肛門と陰唇を撫でられた女侍が背筋を反らし、肩を跳ね上げた。

「感じやすいのお。嗜虐心がそそられるわい」

敵の目の前で、肛門も陰裂も痙攣する風にヒクヒク小さく身じろぎしていた。

息を吹きかけられた余韻を肌の奥　肉孔にも残っており、ピリピリとした甘い快感電気がなかなか消えない。

（屈辱だ……こんな屈辱は初めてだっ………敗れるのならばまだしも、身体の隅々まで鑑賞品にされて、化け物に初めての感覚を教え込まれているなど）

「クヒヒ、尻穴もオマンコもヒクヒクさせておる……ドラゴンさえ両断する女侍も所詮は女か。いや、触手にやられてふしだらな快感を感じるのだからただの女ではない。変態じゃな……どうじゃ、弱いモンスターに女の悦びを感じさせられる気分は」

「拙者は侍っ、変態などでは……女の悦びだと……?」

奇妙な言葉が引っかかり、思わず聞き返していた。魔導師は無視するどころか、喜色満面で解説し始める。

「こいつはとんだおぼこじゃな……女の悦びとは、女だから感じられる快樂のこと。つまりはセックスじゃ」

ニタリと口の両端を吊り上げ、老人は続けた。

「身体を鍛えるのも結構だが、女でありながらセックスの悦びを知らないのは不合理じゃ。」

もつたいたい。そんなスケベな身体をしているのなら尚更な。じゃから、わしが仕込んでやる。触手の魅力をたっぷり教え忘れられぬ初体験にしてやるぞお、イーッヒッヒ！」
双眸を砂漠の太陽みたいにキラキラさせながら叫んだ刹那、全身の触手からドプツと体液が漏れ出した。

螺旋状に締め上げられる肉釣り鐘は瞬く間に汁塗れになる。

粘液は磯のような、栗の花のような臭いを放っていた。

臭いのキツさに顔をしかめたリンコ。その時、乳房も太股も同時に締め付けられた。

「う、くう……あ、そんな一斉にされたら……ふ、ふああっ」

両足、両乳房の触手は息を合わせて責め立ててくる。

同時に締めまり、同時に弛む。両足も双乳も肉が縮まる限り締め付けられる。

たかと思えば、一瞬で力を抜かれて元に戻った。

乳房が締められ、太股が弛み、太股を締める一方で乳房は弛める。

速まる鼓動のリズムに合わせるように、まるで出鱈目のタイミングで施してくる。

「ん、はああ……う、ふうん……ああ、あふあ……こんな、拙者が触手ごときにつ」

幾つもの修羅場をぐぐり抜け、ドラゴンさえ倒した自分なのに、今は完全に触手の玩具だった。

責められる箇所だけでなく、身体中が女の悦びに目覚めたかのように、甘い痺れを強くして火照っている。動悸はますます早くなり、吐息も上擦る一方。このまま自分はおかしく

されるのではないかと、逆転はできないのではないかという諦念が頭をよぎる。

(し、しっかりしろリンコ……拙者は絶対斬姫と称えられた侍だぞ、触手などにいいようにされていいのか)

歯を食いしばりながら総身を叱咤し、何とか立ち上がろうとする。

腕立て伏せをする風に、粘液塗れの床に手をついて、そこまでだった。触手が乳房を締め上げただけで、なけなしの力は霧散して、ふたたび這いつくばってしまう。

「はああ、だめ、なのか……くうっ、胸が、ああ、胸が熱いっ……足よりも、アソコよりも……なぜだ？」

「うむ、適合したか。また面白いことになったのお」

声を上擦らせて身体の異常に戸惑うリンコに、魔導師が意味深な笑みを浮かべる。

(なんだというのだ……はあ、はあ、この感じ……この感じは……似ている……) 芯の肉から燃えている風に熱を持ち、悦楽が渦巻いている乳房は、放尿を我慢している時の切迫感めいた感覚も訴えている。

悦楽で力をなくした瞳に乳房を映していると、触手が動いた。螺旋状に巻き付いていた肉紐は根本に移動し、乳房を括り始める。

シュルツ……シュルツ……。

「はあああうう……むねが、また熱く……ああッ……！」

大人の男でも掴みきれないサイズの双乳は、平素より一回りは大きくなっていた。

性器は排泄器官と同じく、誰にも見せたことのない乳首はピンと張りつめている。鶉色は充血の赤色に代わり、熟れたグミのように円柱形にしこりきっていた。

「う、疼くう……張った胸が……ああ、乳首が、ああ、熱く疼くつ……！」
女の悦びに満ちた双乳は、掻き毟らずにはいられないむず痒さに襲われていた。思わず身をよじり、乳房をグイグイ石床に押しつけてしまう。

「はああああ……んっ………こ、これ……くうッ」

(き、気持ちいいっ……胸を床で擦るの………すごいっ………ッ)

床との乳肌の摩擦は乳房の全部が蕩けそうな愉悦を感じさせてくれた。

自分の体温が移って少し温かくなってきた堅い床と、勃起して敏感さを増した肉の乳首が擦れあい、根本から横倒しになると、鋭い快感電気が乳房の芯を駆け抜けた。

敵に見られていることも忘れた風に、恥知らずに掲げられた尻タブがビククツと短い痙攣を起こす。小指の太さほどの肛門がクパクパ開閉する様子も、堪らなそうな雰囲気醸していた。

「キヒヒ、オッパイが擦れると気持ちいいか？ そら、遠慮なくもつとやるがいい。大きくて柔らかかそうな尻をプリプリ揺らしながら石床オッパイオナニーをする女侍……なんと淫靡で絵になる光景じゃ」

「なっ、せ、拙者はなにを………」

喜悦にまみれたしゃがれ声にハツとするリン。

触手に絡まれ、敵に見られる中ではしたくない自慰をするなど、女侍のすることではない。

(だというのに……そんなことをしたら本当に変態ではないか……拙者は決して変態などではない、侍なのだぞっ)

侍の誇りを思い出し、即座に卑猥な身じろぎを中止する。

「おっ、自制するのか？ どこまでもつかのお」

(くっ……拙者の身体の状態を正確に把握しているのか……っ)

悔しいが、老魔導師の言葉は的を射ている。

早速、額に脂汗が浮かび始めた。眉間に悶え皺を刻む伶俐な美貌が、切なそげな吐息を洩らし始める。

(だめだ……う、疼いて堪らない……痛みならまだ我慢できるが、この感じには)

本能的には言え、乳房を石床と擦らせる自慰をってしまったのがいけなかった。

あの快感が欲しくて堪らないと、胸が疼いて仕方がない。

「ほれほれ、我慢は身体に毒じゃぞ。心と身体を解放し、快楽を貪るのじゃ」
いやに優しいげな老魔導師の声が響く。

敵の言っことなど耳を傾ける価値さえないというのに、妙に心安らぐ説得で。

快感への欲求と耐え難い疼きも、侍の誇りという形のない概念を溶かしていった。

ピチャ、ズリリリ……ピチャピチャズリリッ……。

「ああんツ、んっ、あああ……ふあああ……ああ、ンン……む、むねえ……ん」

汗と触手体液で照り光る尻へと続く背中ラインが上下にゆったり弾みだし、床と胸板で潰れた肉釣り鐘が淫らなバウンドを再開していた。

乳首と乳肌を床と擦れ、その拍子に乳房の内部の肉が攪拌される快感は、我慢していた分濃密だった。

赤みの増した唇から洩れる喘ぎは、普段の女侍ならば決して奏でない官能の音色を孕んでいる。すすり泣くような艶声は、快感に喜ぶ女の高音になりきろうとしていた。

（あああ、し、刺激せずにはいられない……刺激すると、気持ちいい……しかし、ああ、いったい……刺激してもぜんぜん足りない……また、疼いてきて………しかも、あの切迫感が強くなってきて、益々堪らなくなっていく……！）

「クククツ……そろそろじゃな。オツパイがすっかり膨らんで、いやらしく青筋を浮かせておる。乳首もビクビクして……緊張感たっぷり勃起ぶりといい、まるで射精前のペニスだしのお」

尻を上げた四つん這いという無様な体勢で身体を前後に揺すりながら、乳房と乳首も最後に転がす風に刺激していたリンコに、老魔導師はニヤリと笑った。

触手の動きが激しくなる。

締めたり、弛めたりという動作は同じだが、締めるときは乳房がもげそうな位に深く深く肌に食い込み、逆に弛めるときは乳房が自然に元に戻るまで力を弛める。

「はあああ、はあっ……んっ、ああん、む、胸が………ああ、熱くて、な、なにか……

……出そうだ……ああ、で、でるつつつ……!」

疼きと乳悦と共に乳房を占領する切迫感、まるで放尿を限界まで我慢したときと同じだった。何も出るはずはないと言つのに、何故か何か出てきそうな気がして仕方がない。激しい触手の責め。

研鑽を積んだ身でも我慢できない胸の疼きを、みつともない体勢で自ら解消する。

ドラゴンと戦つたときでさえ苦悶とは無縁だった端麗な細面は、快感で悶えていた。誰も迎え入れたことのない、ツルリとした無毛の処女秘唇からは、甘酸っぱい汁をトロトロこぼれ、触手に揉まれていた太股を汚している。

(あ、快感で、あたまが……ああ……あああ……!)

頭の中にもやががかり、意識が遠のいていく。

なのに、乳房や太股、女性器に迸る悦楽は鮮明で、

「ほれ出るぞつ、今出るぞつ、出すのじゃ『絶対斬姫』! 思い切り出すがいい!」

老魔導師の強い言葉が、快感と火照りでぼやけたリンコの頭に染み込んでいく。

女侍は、命令に従順な操り人形のように、口走っていた。

「はああ……あああ……出るう……ああ、出るううう……はあ、んはあああ、あ……

……ああん、出るうううウウンンンン!」

ビクビクビクビク! ブシヤツァア! ブシユ~~~~~!

背筋がのけぞり、突き上げられていた尻が伸び上がった刹那。

狭い狭い秘裂から多量の愛液が噴出した。床に向かって豪雨さながらに降り注ぐ。甘酸っぱい臭いを撒き散らしながら、ひしめく触手を濡らしていく。

括りだされ、リンコの胸板と石床に潰されていた乳房の先端、床でなく前方を向いていた勃起乳首からも乳白色の汁が飛び出していた。水を打ちだした風な勢いで飛んでいき、進行方向にいた触手の群に直撃する。

「はあっ……はあっ……なぜだ、拙者は妊娠していないというのに……はあはあ、なぜ母乳が……あ、はああ」

妙に心地よい倦怠感と爽快感が身体を包む中、リンコは濡れた掠れ声を出す。

母乳はまだまだ噴き出していた。放出の感覚は、我慢の末の放尿よりもずっと丸っこい甘美で、何度でも味わいたいと思わせる中毒性も孕んでいる。

「希に、触手の体液と反応を起こす体質というものがあっての。お前はそれに当たったのじゃよ。それで、妊娠していなくとも母乳のである体質に変わったというわけじゃ」

「な、なんだと……そんな馬鹿なことが……」

「どっじゃ、母乳が出る快感……射乳快感は最高じゃろ？ ふつつの女ではまず味わえない快樂だ。そうら、射乳をしている間は処女喪失セックスも、ヴァージンアナルセックスもそれほど苦にはなるまい。触手で気持ちよく初体験をすませてやるぞい」

それが合図になったのか、太股に居座っていた触手がゆっくり上がってきた。

一匹は汗で光る肛門の浅瀬に、もう一匹は濡れた処女秘唇の入り口に軽く入り込む。

「なっ、はあはあ、やめろっ、そこは、そ、そこも……あ、あああッ~~~~~!」
自分でも必要なとき以外に触れたことのない場所に、人肌の体温と感触と、ドクドク脈打つ振動を押しつけられた瞬間、何をされるのかを悟り、叫んでいた。

きつと入り込むつもりなのだ。

触手が体内に入ってくる。意識するだけで、快感にぼやけていた頭が覚醒した。慌てて逃げようとしたが、依然として脱力から抜け出せない身体は、亀がもがく程度の抵抗もできなかつた。

無駄な努力とあざ笑うような勢いで、入り口に居座っていた触手どもが脈動を強め、グツと硬さを増した。

ジユブブブブブ~~~~~!

「ひいっ、ああっ、ああああアアア~~~~~!」
触手は一気に入ってきた。

肛門をくぐると同時に陰唇も突破された。肉の薄壁を隔て、両側に触手の存在を感じさせられる。肉紐は鉄棒の芯を入れたかのように硬くなっているので、間違えようがない。

(は、はいつている……触手が……化け物が)

目を閉じてても、意識から追いつけずとも、触手が入り込んでいることを意識せずにはいられない。

ブズンツツツツツ!

直腸を自分の形に型どりしている向こう側では、仲間が処女膜を破って膣内を自分の太さに拡張していた。

あつけない処女喪失に、熱い涙がこぼれる。愛する男がいたわけではないが、慰み者にされて女にされるなど惨めで堪らない。しかも相手は化け物。穢されたと、そう思えて仕方なかった。

「ウハハハ！ 『絶対斬姫』が泣いておるわ。ドラゴンさえ両断したという女侍が、小娘のように泣いておる！ いいぞ触手よ、もっと責め立てろ！」

触手は身体の血管で膣ヒダや直腸を擦りあげながら、最奥に到達する。

腹と尻に満ちる膨満感が、征服されたという実感から目をそらすのを許さない。

「はあ、はああ……………こんな最低の状況なのに……………」

リンコは咳かすにはいらなかった。

（どうして、苦しくない……………痛みがないのだ……………はあ、はあ、はあ、か、快感だけが拙者を満たす……………？）

悶えながら自問するが、答えはどこからも湧いてこない。

瞬間的に戻った思考も、触手の蠢きによって淫靡な情動に塗りつぶされてしまう。

熱く火照る乳房に、再び甘すぎる切迫感が下りてきた。

胸元に巻き付く触手の脈打ちにあわせるようなりズムで鼓動が刻まれ、頭が真っ白になった刹那、

ブシユウウツウウウウウウ！

「ああンンンンン~~~~~！ ハアツ、ハアツ、ハア~~~~~！」

（尻に、女陰にも、触手が入っているのに、う、ンンンツ、処女を奪われたのに、ぽ、母乳が、ああ、また出るううツ！）

二穴に入った仲間に負けるものかと言わんばかりに、乳房に巻き付く触手が動いている。何度も何度も射乳させられ、母乳噴出の快美を頭と乳房に刻み込まれた。

表面に浮かせた血管をドクドクドク脈打たせながら、締めては弛み、弛んでは締める肉紐に、乳悦の固まりにさせられている乳房は、あっけなく幾度も屈服もする。

噴出する母乳は周囲を水浸しにしていた。触手体液の栗の花臭を打ち消す濃厚な甘い香りとその味は、肉紐の気に召したらしい。陵辱にあぶれている個体は、先端を水たまりに突っ込んで、ピチャピチャと舐める仕草をしていた。

（母乳が、触手に飲まれている……………ああ、いやだつ、あんなものに搾り取られた母乳を飲まれるなどッ）

「んあッ……………ま、また出る、ああ、いやだ、出るなでるなでる　んああああアアアアアア~~~~~！」

美声を官能的なソプラノに変えた女侍が、這いつくばったまま背筋を反らす。

自分の性別を忘れ、侍として鍛錬の日々を送っていた女には、抗う術などありはしないのか。

射乳快感は意識をドロリと腐らせ、数千の軍人を屠ったドラゴンも倒した女侍を、悦楽を感じるだけの人形にしてしまう。

「ヒーツヒーツ！ これは愉快だ、『絶対斬姫』ともあるう者が、触手に懇願しておるわ……お前の言うことなど誰が聞くか。そうら、もっと射乳しろ、女の いや牝の悦びの泥沼に堕ちてしまえ！」

「ひいっ、い、いやだああああ、拙者に射乳させるなあああ、んああッ……ああひあ、な、中で暴れて。あ、ああ擦れる、擦れてるうっっっ！」

膣と尻の触手が、本格的に暴れ出した。

排泄しか知らない直腸と、自分が拡張することなど信じられないであろうウブな膣内を、触手が出ては入っている。

肉紐は進入してきたときより硬く、まるで鋼の芯が入ったかのよう。燃えるような熱さも孕んでいる。生命力に溢れた脈動も健在だった。

遅いといしか言いようのない触手の出入りは、快感しか生まない。

（最初は、内側から押されて苦しいと感じた気がするのに……はあ、はあっ）

内部の粘膜を駆け抜けるのは、痛苦ではなく悦びだけなのだ。

肉の孔の内側を広げられては閉ざされること最中には、艶やかな吐息しか吐けない。

慣れているわけではない、初めての体験だというのに、破瓜の痛みの記憶さえ曖昧で、

自分は最初からこうして喘がされていたのではないかと半ば信じてしまっていた。「処女の

見本みたいな平たいオマンコじゃが、もうふしだらな汁をだらだら垂らしてある。早速破瓜の血も流されきって……尻も触手が気に入ったようじゃのお。食いつくみたいに吸い付いて、コイツが抜けようとするやと肛門が引つ張られて後ろに伸びておるぞい。まったく

『絶対斬姫』は変態で淫乱じゃのお」

「ああん、ああ、だ、黙れっ、せ、せっしやはああ、はあ、はあ、っ、へんたいではないぞっ、く、くうんん、か、感じてなどいるものかあ、あひい、ぼ、母乳でる、しゃ、射乳するツツツ！」

馬鹿にされるのが悔しくて、何とか快感を我慢しようとするが、無駄だった。

すっかり昂ぶった身体は、触手の責めを歓迎するように、えも言われぬ快感を頭に伝えてくる。

前と後ろの肉孔の最奥まで征服した触手の先端にドスドス突かされると、直腸を激しく擦りあげられる度に、触手はピーンと硬くなる。ジワジワ大きくなる触手の感触と、ぬるつく身体で肉孔をしつこく研磨される快感は、胸の奥をジンと妖しく痺れさせ、女侍は甘ったるい嬌声を張り上げてしまっ。

「はあ、はああ、ま、またで、出るうううっ~~~~~！」

カララツ、カラカラ……………。

何度目かもわからない射乳をさせられた時、ずっと握っていた刀が手から滑り落ちた。

(しまった……も、もう、掴み取る力など残ってはいないぞ……！)

第二話 触手に変えられる肉釣り鐘、破られる処女膜



「あああつ、ひあああ、こ、こんなの知らないっ……せつしゃはしらなひのに、かんひるうろう……っつっつ」

全身が浮遊感に包まれて、何も考えられなくなる感覚。

今日一番の快楽に、尻上げ四つん這いの女侍は全身をビクビク痙攣させた。

焦点の合わない目。赤みの強くなつた唇を半開きにし、舌をだらりと突きだしている様子は、とても女傑とは思えない。

「ウーヒツヒツ！ 敗北という文字がよく似合う無様な姿じゃのお。いいか、それがイクというものじゃ。母乳を出すオツパイ絶頂も混ざつておつたが、女性器で気をやるオマンコイキとはそういうことなのじゃよー！」

哄笑する老魔導師は、ギラギラと凶暴に輝く眼差しで続ける。

「まだまだ終わらんど。男知らずの身体と魂に女の悦びを刻みつけてくれる。それが依頼だからの」

「と……とりひき……？」

心に引つかかった老魔導師の言葉を反芻するリンコだったが、そこまでだった。

触手どもの責めが再開し、意識は快感で塗りつぶされていくのであった。

第二話 卑劣騎士団長に飼い馴らされていく女体と心

「くふうあ……ああつ、そ、そんなに激しく出入りされたら……あ、あああ、ま、また達する、うッ、あああアア~~~~！」

ビクビクビクビクビクッ！

リンコは裏返った嬌声を張り上げ、ほとんど裸の全身をガクガク痙攣させた。

老魔導師に敗れてから、ずっと触手に陵辱されてきた。

時間の感覚はとうになくなっていて自信はないが、数日以上は確かか。

リア、ソフィア、リンコの三人は、敗北を喫した洞窟の広間で磔にされている。

両手足を外側に広げた無防備な格好だった。

もっとも忌々しくて屈辱的なのは、衣装だ。

ぴつちりした黒グローブとニーストッキングを着させられていた。首には、肌張り付いてくるチョーカーをかけられている。

他に身に着けている物がない上に、けしかけられる触手になすすべなく犯されるしかない現状は、敗北し奴隷扱いされている事実を痛感させられる。

「も、もういやっ……あッ、あッ、何であたしが触手なんか、い、またイクッ」

「はあッ、お、お尻がつ、わたくしはクレリックですが、相手は触手なのにッ」
すぐ側で無数の触手に嬲られているリアとソフィアは嫌悪の心情を吐き出しているが、

声音は甘ったるい。快活そうな端正な顔も、深い慈愛滲む上品な美顔も、その半裸の肉体同様、汗と粘液で照り光り、色っぽく赤らんでいた。

「キヒヒヒ、身体はだいぶできあがってきたようじゃのお。快感を感じ易く、しかも貪欲に求める、いやらしい牝の身体に変わってきておるわい」

何度も頷く老魔導師。見詰める先は、ひっきりなしに奏でられる三者三様の艶声に耳を傾け、何度触手が出入りしても、後から後から白みがかった愛液　　いわゆる本気汁を吐き出す股間だ。

（み、見られている……ああ、見られたくないのに、どうにもできない……見られるままでいるしかない）

リンコが胸中で歯噛みしている時だった。

カツカツカツカツカツ……。

規則正しい足音が聞こえてきた。

訓練された軍人のものだと思っていると、足音の主が広間に入ってきた。

「順調のようだな。教育は」

酒樽腹と油断のない双眸を持つ中年が、教練中の教官を褒める風に鷹揚に言つ。

リンコたちの知る人物だった。

「ガラル卿……なぜここに！」

「やっぱりあなたの差し金かアツ！」

リンコが驚いて目を見張った後、リアが憎々しげに叫ぶ。

中年騎士団長は部下の働きぶりに破顔する風な笑みをたたえながら、散歩の足取りで歩を進め、リンコの目の前に立った。そのまま語り始める。

「気づいた者もいたようだが、今回のことは俺が黒幕だ」

「卿が黒幕……何故ですっ」

「決まっている。内定を断ったからだ。窓口にさせられた俺のメンツが丸潰れだということとはわかるな？ 断るなんて選択は、お前らにはなかつたんだよ！ だから決めたのだ。三人とも俺の肉奴隷にし、言うことを聞かせるとな」

騎士の剣を腰に下げる軽装の団長は、リンコを一瞬睨んだが、すぐに口角をつり上げた。

41

「ふむ、着物の下はこうなっていたのか。見事なものだな。戦いに身を置く女……例えば女騎士共も何人も味わってきた俺だが、こつも見事な身体は見たことがない。実に美味そつだ」

舌舐めずりをし、口角を邪悪に吊り上げる。とても騎士団長とは思えない、醜悪な仕草だった。

「下劣な！ その目を潰してやれないこの身が口惜しい……！」

「ほう、触手に徹底的に犯されていたというのに、まだ心が折れていないとは………おもしろい、折ってやる楽しみが残っていたか、フハハハハ！」

ガラルは腰の剣を抜く。室内を淡く照らすヒカリゴケの光を反射し、ブロードソードがキラリと光る。

騎士団長が動いた。全盛期は過ぎているというのに、並の騎士では真似のできない素早い剣裁きで、リンコを礫台に固定していた鋼鉄の枷を斬り裂くと、剣を収めた。

鋼鉄の枷が石床に落ちるけたたましい衝突音が鳴り響く。

(これは好機だぞ！)

斬られた枷を追うように膝をついたリンコの目が光る。

身体は自由になった。ガラルから剣を奪えば敵に対して優位に立てる。大切な仲間を救うことができる。

長い時間の拘束と、拷問めいた性感責めでふらつく身体の力を必死に振り絞り、立ち上がるうとした時、既にガラルに背後を取られていたことに気づく。

「くっ……しまった……」

身体に巻き付いていたものも含め、周囲の触手は波が引く風に離れていく。

もっとも、リアとソフィアは依然として肉紐の餌食にされている。ふたりの喘ぎ声に混じり、甲高い金属音が響きわたった。

ギランギアララッ！

「なっ！」

「その驚きようは案の定か……俺の剣を奪って形勢を逆転させようとしたのだから？ お

見通しだリンコ」

腰の剣をずつと遠くに放り投げたガラルは、背後から女侍を立たせた。彼の前半身と、リンコの素肌の後半身が隙間なく密着し、尻と股間も重なり合つ。

(ガラルの、男の感触が……体温が拙者の肉体に……)

衣服越しに伝わる酒樽腹の身体は、思ったよりも筋肉質だった。鉄棒のような硬さと人肌の柔らかさを混ぜ合わせた風な感触を生尻に感じた瞬間、何故か胸がトクンと鳴る。

「きめ細かくてなめらかな肌……ピンと張っているのに柔らかい。これで傭兵だけでなく娼婦も始めたら、さぞや稼げるだろうな」

「娼婦だと……拙者は侍だ、そんなことはしないし、似合うなどと言われるのは侮辱だぞ……！」

「よく言つ。身体のスケべぶりなら既に娼婦を越えている牝侍が」

脇の下から手を通し、肉の詰まった戦う女の太股、ニーストッキングと裸の肉の境目、砂時計めいた括れのウエスト、背の低い筋肉の丘を作る縦長のへその周囲をなで回してくる。

手に力を入れない軽いタッチは、触手に昂ぶらされていた女体を目覚めさせていく。

触れられる箇所じんわり妖しい痒みが起こり、思わず腰をくねらせてしまつ。

「せ、拙者に触れるな下郎……つく……はあ……はあ……」

「そら見る。触る男の手に吸い付いてくる上質の肌触り、しかも少しやっただけでもう発

情する感じ易さ。娼婦顔負けではないか。どら、こちらはどうか

自分から前に出て、後ろからの抱きつきから逃れようとした刹那、両方の乳房を鷲掴みにされた。

「はああああツツッ！……そ、そんなに強く揉まれたら……んああッ」

破壊音でも聞こえてきそうな、強烈な握り方だった。

ガラルの開かれた十指が容赦なく肉釣り鐘に食い込んでいる。広がった指の股からは、女侍の瑞々しい乳肉がむにゆりとはみ出していた。

乳房を揉まれた瞬間、憎い敵に背中を委ねる風にのけぞるリンコ。はあはあと息を弾ませる姿は、疲労で息を乱していると言っよりも、快感で身体が昂ぶっていると言った方がいい婀娜っぼさだ。

(なんだ、拙者の胸……快感が爆発したような感じだったぞ……)

あまりの感じ易さに戸惑い、揉みしだかれた瞬間のことを反芻する。

思い切り握り潰された時、鼻先で白い火花が盛大に散った。乳房全体を揺すぶるような甘ったるい快美と、火が点いたような熱感が燃え上がり、握り込まれたままの今もジンジンと心地よい。

「ククク……突きだしている上に敏感だろ？ このデカチチは。いやらしいものだな。男を誘っているとしたか思えないぞ」

「ば、ばかな……拙者は男を誘ってなど……拙者は侍なのだぞ」

脱力する身体にむち打って、半分だけ後ろを向くと、間近にあったガラルの鼻先に啖呵を切る。だが、声には普段の力強さはない。どう聞いても強がりには聞こえない弱々しさだった。

「そんな潤んだ瞳で睨まれても、挑発しているとしたか思えないがな」

モミツ、モミュモミュ、モミモミモミイッ！

ガラルは両手を蠢かせる。衣服がなくとも脇の下のラインからはみ出る上に、胸の正中線で押し合う豊満な双乳は、さしもの騎士団長の大きな手のひらでも征服できないボリュームだが、易々と握力に屈服し、指に沿ってひしゃげている。

「いい感触だ。弾力が強くて、押ししても生意気に押し返してくる。支配欲がかき立てられるぞ。勇ましくてふしだらなお前の持ち物にふさわしいデカチチだなあ」

岩のようにゴツゴツした男の手のひらに広がるのは、柔らかいがゴム球みたいに弾力たっぷり感触だ。どんなに潰しても、ふっと力を抜くだけで指を押し返しながら元に戻る弾力感、生意気さを感じさせ、もっと虐めてやろう、くたくたになるまで揉んでやるという性欲混じりの嗜虐心を煽られる。

「俺に揉まれる感触を覚え込ませてやる。一日たりとも、この手に揉まれないでは我慢できない奴隷乳にしてやるぞ」

「そんなことになるものか、はあ、はあ、せ、拙者は絶対に、お前の軍門には、ああ、あーん、く、下りはせぬぞ……お、あッ」

抵抗できない状態だというのに、屈服を拒む姿勢はリンコらしい。しかし、揉み込まれる度に甘い吐息を漏らしている。握り込んだ状態で根本から捏ね回す風に揉んでやると、堪らなそうに腰と太股を震わせている。

「乳首をこんなにビクビク勃起させている女侍がよく言う」

キュツキュツキュツ、シコシコ、シコシコシコ。

ガラルは乳房を軽く握った状態で、親指と人差し指で乳首を摘み、擦り始めた。

平素ならば鶉色に煌めいている乳首と乳輪は、赤く膨張していて、男の指にしっくり馴染む。乳輪は杯をひっくり返したような姿に変わり、乳頭はよく熟れたグミのようになっていた。見た目も、幾ら嫌がっていても身体は感じている強情な女を責める悦びを強め、行為に駆り立てる。

「はああっ……ひうあっ……ち、乳首、拙者の乳首があ」

（感じてしまう……ああ、触手に散々弄られて淫らに開発され……今はこんな男に弄ばれている拙者の乳首が……あああ、感じてしまうッ）

無骨な指は乳頭の表面を擦りあげるだけでなく、扁平に潰してきたり、潰した状態で根本から揺すぶってきもする。

様々な方法で刺激される乳首は、揉まれていた乳房のようにカツと熱くなり、鋭い乳悦が駆け抜ける。閉じていられない口から洩れる喘ぎは、徐々に官能的なソプラノになりつつあった。

(あ、ああ……………アソコも熱くなっている……………乳首を弄られる度にジュンツ、ジュンツ
て恥ずかしい汁が出ている……………)

自分や大切な仲間を陥れた男の手にかかっているのに、恥知らずに乳悦を訴える乳房に
触発されたかのように、股間も発情していた。

肩幅に開いた足の付け根の間からは、湯気が見えそうな淫熱汁がトロトロトロトロ流れ
ていて、鼠径部からむき出しの太股上部 生太股 へ、さらにニーソックスをびっ
り着込んだ太股下部から膝、下腿へと伝い落ちていく。

(触手陵辱で、変えられてしまった陰唇が……………あんなに)

平らだった秘唇は、触手陵辱によつてこんもりとした肉丘に変わっている。

肉ビラのはみ出しこそないが、クパアクパアと小さな開閉を繰り返しているのは、女
侍が情欲に昂ぶっているわかりやすい証左だ。

(拙者のこのような有様……………こんな卑劣な男に見せられるものか……………)

力を振り絞り、笑う膝を叱咤しながら太股を閉じようとしていたら、

「我慢できなくなつて自分から太股を擦りあわせているのか？ いやらしいやつめ」

気づいたガラルは片方の乳房から手を離し、閉じかけていた太股の間に突っ込んだ。

乳房と乳首を辱めていた指先をふたつ、秘唇の中に忍ばせる。

「ひっ、や、やめろっ……………いまそんなことをされたら……………く、ううん！」

また背中を仰け反らせてしまった。快感で意識が白んでいるせいか、受け止めてくれた

中年の胸板がいやに頼もしく感じられ、背中に安心感に満ちた恍惚が広がる。

グチュツ……グジュツ……グジュグジュ。

「はあ、はあ……んっく、や、やめろお………いますぐ、指を………はあ、はあん」

阿るような制止の声に重なって、まるで泥沼をかき混ぜている風な淫猥な水音が響く。

硬い手指は我が物顔で内部の蜜ヒダを引っ掻き回している。

不必要な力を入れず、最小限の力を込めた指先だけで蜜ヒダを掻痒する所作は手慣れているとしか思えなかった。触手に開発された性感帯は従順に反応を示し、ぐじゅりと新しい密を漏らしている。

「ヒダが吸い付いて、その外の肉がギュウギュウ押ししてくるこの感じ……指だけでなくチンポも疼いてくるぞ」

性感で火照りだしている女侍の膣内は、相手が仇敵でもお構いなしに熱烈に抱きついていく。指の感触、温もりと共に伝わってくる膣孔の拡張感、背筋をゾクゾク震えさせ、思考力をどんどん削りとっていく。

「はあああ……あふっ、うっく……そ、そこはよせ、あ、あああアッ……」

膣を起点に起きている快感が、身体をぐずぐずに溶かしているようだった。ジーンという悦楽で全身を脱力させた女侍は、腰からくの字に折れかける。

「おっと、もう立ってはいられないくなったのか？ 本当に淫乱な侍だなお前は」

しかし、ガラルは許さない。

張り付かせていた手のひらで乳房をゆったり揉みつつ、リンコの背筋を伸ばす。

男を感じずにはいられない手のひらで胸を揉まれる快感は、脱力した女に甘い吐息をこぼさせた。

「そら、お前のココは、よせと言っていないぞ。むしろもっとして欲しいとねだられていくようにだ」

自分の胸板に寄りかかる女侍の顔の横に顔を置いたガラルが囁いてくる。

(悔しいっ……こんな男に……拙者はなすがままなのか)

陰唇の淫らな反応を見透かされた羞恥と悔しさに唇を噛むが、乳房の内側深くまで五指が食い込んできた快感で、あっけなく、あられもない叫びを上げてしまった。

ガニ股加減に開いた太股には、自らが垂れ流した愛液で川ができ、幾つも支流ができていた。露出している太股上部も、ニーストツキングに包まれた太股下部から下の美脚も、断続的にガクガク震えて止まらない。

(あ、ああ……アソコが、疼いて……もっと強い刺激を欲しがっている)

指よりも太い触手で徹底的に磨き上げられていた膣が切ない。

思考力の衰えた頭の中に浮かぶのは、指でなく触手が入りするイメージ。

ゆっくりしたものではない。恥ずかしい汁を飛び散らしながら、聞くだけで興奮させられるほど派手な水音を奏でる、そんな激しい抽送だ。

ズクズク……ズクンツズクンツ……。

「感じていると言うよりも物欲しそうに蠢いているな、お前のココは……もっと太いのが欲しいのだな？ 例えばこういう奴だ」

ガラルはリンコを離すことなく器用に服を脱いでいく。

手早く全裸になると、膣を弄くって手首まで濡れきった手で、彼女のピッチリ黒グロ―ブの手を取り、ペニスを握らせる。

「な、なにを………ッ！ こ、こんなものを拙者に触らせ」

「言うことを聞かなければ他のふたりを殺す」

耳元で囁かされた言葉は、少し離れた場所で触手に責め立てられているリアとソフィアには聞こえないであろう音量ではあるが、リンコの心を凍えさせるのに十分だった。

冗談やはったりとは思えない強い意志と悪意を籠めて言葉を放った男が、ニヤニヤ笑いを消して、じつとこちらの目を見詰めてくる。

(本気なのだ……)

自分たちが圧倒的に不利な立場に置かれていることは、考えるまでもない。

言葉通り実行しても、ガラルにどれほどの不利益があるだろう。自分たちを陥れるためにここに派遣したのなら、彼に面白くない事柄が起きないように備えていたとしても不思議ではない。むしろ、そうでないと考える方がおかしい。

ここにガラルが入ってきたときの言葉が思い浮かぶ。

お前たちには拒否する余地はないという台詞が。

(ふたりの安全には代えられない……拙者さえ忍従すればよいのであれば……)

震える黒グローブの指先が、先ほどまで尻に触れていた男性器に伸びる。

サワリ……。

「ククツ、どうだ俺のチンポは。よく触ってみるといい」

自分からペニスに触れてきたのを見ると、嘲笑混じりに命じるガラル。

逆らえない惨めさを覚えながら、リンコは言われた通りに手のひらを這わせる。

(これが先ほどから拙者の尻タブにあたっていたものの正体………男性器というものか

……初めて見るが………)

初体験の相手が触手だった女侍は、知識でしか知らなかった男根に手のひらを這わせた。根本から先端、先端から根本へとゆっくり往復すると、肉棒は雄々しく跳ねる。

(熱くて硬い……あ……ああ、ドクドク脈打って……触手よりも逞しいぞ)

着けさせられている黒グローブは、素手と遜色ない触れ心地を伝えてくる不思議なアイテムだった。

ほとんど刀を振るうことしか知らず、異性などと繋いだこともない若娘の手のひらに、火傷しそうな熱感と、鋼のような硬度が広がっている。

(なんだか胸がドキドキするぞ……)

生命力たつぷりの脈動には、触れているだけで胸がキュンときめかされる。性感帯を責められているわけでもないのに、心臓の動悸がやけに甘いのに戸惑ってしまう。

(おかしな気分……………こんな汚らしいものに無理矢理触れさせられているのに……………この気持ちは)

長さは手のひらから飛び出すほどで、太さは指数本分にも及ぶ。皮の剥けきつた亀頭の形はイチゴを逆さにした風だが、色は使い込んだ武具のような赤黒さ。傘のように開いたカリ首から下の肉棹も、やはり年季を感じさせる黒ずんだ肌色をしており、浮き上がっている青や紫の血管はまるでミミズのように見える。

率直に言つて、触手よりもグロテスクだ。

子供を作るときは、これが女性器に入るはずなのだが、とても入れていい物とは思えない。大事な部分が壊されてしまつのではないだろうか。

どこをとつても心ときめく要素は皆無。

「はあ……………はあ……………すごいぞこれは……………」

しかし、目が離せない。鼓動が心地よく速まつていく。

はしたなく吐息を乱すリンコは、感触を確かめる風に、染み込ませるように、指を丸めてペニスを包み込み、手首を前後させ始める。誰にも教えられていないのに、命じられたわけでもないのに、男が自慰する風に奉仕してしまっていた。

(ああ……………手の中で益々硬く熱く大きくなって……………ビクビク震えて……………なんだ、汁が出てきたぞ……………これが精液という奴なのか?)

一回り大きくなりながらビクつく亀頭は、透明な汁を吐き始めた。

触手の体液よりもトロミが弱いが、伸びると糸を引く。黒グローブの手に絡みつぎ、二チャ二チャと卑猥な音を生む。触手に膣を掻き回される時と同じ類の、泥沼をかき混ぜるような、恥ずかしすぎる粘い水音に、リンコは赤面していた。

「おいおい、そこまでやれとは言っていないぞリンコ」

大きくないが広間中には聞こえる音量は、呆れた風だった。

ハツとしたリンコが、弾かれたように手を離す。手に男根の汁がついているのに気づくと、あわてて振り払う仕草をした。

「出会って間もないのに俺のチンポを気に入ってくれたとは嬉しいぞ。お前はもう、立派な牝だな。触手だけでなくチンポにも興味津々の淫乱だ」

「せ、拙者は……そんなつもりでは……いつの間にか無意識に……」

長い髪をなびかせて何度も首を振る女侍に、ガラルは諭す風に穏やかに言った。

「触手開発の成果が出始めている現れた。チンポを見ると興奮する女のサガがお前の中で肥大しているんだよ。もうお前は、チンポに逆らえなくなり始めているんだ」

「まさか……バカバカしいっ………男性器に逆らえなくなるなどありえない」

言いながらそっぽを向くが、心臓はまだ妖しい鼓動を繰り返していた。へそ近くまで反り返りながら、透明の汁を垂らすペニスをチラチラ見てしまう。

（なぜだ………自然に目がいつてしまう………目が離せない）

「ならば耐えて見せるよ？ そちらっ！」

ズジユウウウウウウウ！

背後から細腰をガツシリ掴み、汁でたつぷり濡れた秘裂に亀頭をあてがったガラルは、一気に腰を押しつけてきた。

潰れた尻タブが男の下腹部に広がった刹那、肉棒の先も子宮口を串刺しにする。

「んあああああ~~~~~！」

広間の大気全部を揺すぶるような派手なよがり声を上げながら、顎を跳ね上げてしまつ
リンコ。

意識しない、無意識の反応だった。叫んで仰け反るっている間、甘すぎる快感のせいで意識が飛んでいたのだ。

(は、入ってきたのか……先ほどまで拙者が撫でていたあの逸物が……アソコを満
たしているのか……?)

はあはあと呼吸がせわしなくなる中、膣の方に意識が向く。

(あああ、やはりドクドク脈打っている……拙者の中を自分の形に押し広げ……熱く
硬い感触をなすりつけている)

恐る恐る股間を見ると、充血して厚みの増した陰唇が内側に巻き込まれていた。
触手の相手をさせられていた間でも、ここまで引つ張られていたことはない。

改めて、自分の膣に怨敵のペニスがみっしり詰まっていることを思い知らされる。

(はあ……はああ……ふ、太くて長くて……ああ、中がいっぱいになっているのに)

赤みの増した形いい唇から、はしたない呼気が何度も洩れる。全身が心地よい浮遊感に包まれて、安らぎさえ覚えてしまう。何よりも快感が強い。ただ挿入されているだけでも、バチツ、バチツと断続的に目の前で火花が散っている。太い肉の刀を打ち込まれた下半身は、嬉しそうにビクビク震えて止まらない。

膣が壊れるどころではない。痛みや苦しみはなく、快樂だけを味わわされている。目眩く悦楽に頭をぼやけさせていると、ガラルが囁いてきた。

「命令だ」

ふたりを殺す。そう言った時と同じ拒絶を許さぬ迫力を纏わせ、言葉を投げかけてくる。告げてきたのは、端的に言えば言葉遣いの強要だった。

「俺に抱かれているときは、拙者などという喋り方ではなく女言葉を使え。卑語もな。こつちはどうせ聞いたことも知識もないだろうから、俺が教える。指示通りに言え」

「せ、拙者はそのような」

「なんだと?」

ガラルが鋭く睨んできたので、抗議は尻切れトンボになった。威圧的な視線ではあったが、決して卑劣漢に恐れをなしたわけではない。拒めば仲間たちも自分も危ういことを思い出したからだ。

「わかったようだな。返事をしろ」

「せ、拙者……い、いえ……私はわかりました………従います………」

普段聞いているので女言葉を使うことはできるが、使っていないのでぎこちない。ガラルはそれでも満足した風だ。文句を言うことなく、代わりに責めを再開した。

「あああンンッ！」

(う、動き出した……ああ、ナカが擦れて……奥が、ず、ずんずん突かれるうっ)
両乳房を揉みたてながら、ガラルは腰を前後動させる。

最初から激しい抜き差しだった。

「まったくお前の子宮口は突き上げ甲斐がある。チンポが痺れて堪らんぞ」

突き上げるときには渾身の力を籠め、子宮をずうんと押し上げてくる。リンコの目の前は真っ白に染まり、アツアツ、ヒツヒツと短く鋭い喘ぎ声を上げさせられた。

「おおっ、ここまで吸い付くか。そんなに俺のチンポにいて欲しいのか？」

腰を引くときのカリが膣ヒダを引っ掻いていく様子も堪らない。膣全体の媚肉は熱剛棒を食い締めているので、膣全体が持つて行かれる快美も味わわされて、思わず仰け反り、乳房を突きだしてしまう。

「そらっ、戻ってきたぞ！ もっとチンポに吸い付け、もっとチンポをしゃぶれ！」

再度挿入する際は、駆け抜ける風に一気に来る。一旦離れた尻タブが、男の下腹部と衝突し、小気味よい打擲音が鳴り響くと、耳の奥がジンと痺れた。

猛烈な勢いで尻タブを押し潰されるのも、ペニスの根本と陰唇が潰れあつ下半身全体が

揺すぶられる衝撃も、グジュリという聞くだけで耳たぶが熱くなる恥ずかしい音を聞かされるのも、心臓の鼓動を甘酸っぱく早めていた。

耳鳴りし始める耳元で、ガラルの新しい命令が囁かれる。卑語の強要だ。

「あ、ああッ！ お、オマンコいいッ……………はあ、はあ、チンポでグジュグジュズンズンされてるオマンコいいッ！」

あられもない台詞を口にする。端から見れば、憎むべき敵に犯されて喜悦を上げている風には見えないうリンコ。少し離れた場所にいるリアとソフィアが、信じられないと言つ顔を向けていた。

「リンコお姉ちゃん……………どうしたの、何を言ってるの」

「そんな……………まさかリンコさんが……………ガラルなどに屈服したとおっしゃるんですの」

ふたりを責め苛んでいた触手は引き上げていた。

場の全員を視界に収める老魔導師が、汚らしい笑みを浮かべている。

（ちがうのだ……………リア、ソフィア……………拙者は本当はこんなことを言いたくは……………）

大切な仲間たちに聞こえぬ小声で淫らな台詞を強要されているだけなのだが、事情を知らないふたりは悲しみに満ちた顔をしている。

曇り空を知らない太陽みたいなリアも、常に温かな雰囲気を滲ませるソフィアも、揃って力なく眉尻を垂らしている姿は、リンコの胸をチクチク痛ませる。

軽蔑されたかも知れない。見限られたかも知れない。何よりも強固と信じていた絆が切れてしまった気がして、不安で仕方がない。

「あーん、あーん、リア、ソフィア見てえ……私、ガラル様にオマンコしていただいているのお……ガラル様のぶつといチンポで犯されるの、気持ちいいのオ！」

（ああ……ああ……ふたりのあの顔……拙者は、本当に最低の言葉を口走っているのだな……ああ……なのに、拙者は……ふたりに嫌われたかも知れないという時にガラルに犯されているのに……どうしてこんなに感じてしまうのだ）

女侍の女体は華やいでいた。

つま先から頭のとっぺんまで官能に包まれて、恥ずかしすぎるソプラノの嬌声が止まらない。

胸を揉むガラルの手に、黒グローブの手のひらが重なった。意識してしたことではなく、肉の悦びに沸く女体が勝手に動いていた。悦楽を与えてくれる牡にすがりつく風な雰囲気醸し、自分の胸を揉む風に彼の手の甲を包んでいる。

ニーソックスで包まれる足指は、何度も何度も丸まっていた。ガラルが腰を挿んで身体を支えてくれていなかったら、きつと無様に倒れ込んでいたことだろう。

そう思うと、男への頼もしさすら湧いてくる。好意的な感情は、犯される愉悦を濃厚にし、嫌々言っていたはずの言葉をなめらかにしていった。

「が、ガラル様あ、で、デカチチを……スケベに膨れて、乳首を勃起させてるデカチチを

揉んでくださいいっ、オマンコだけじゃ物足りないんですう」

おねだり言葉は媚たつぷりで。いつもの凜々しさなど影もない。瞳の潤みぶりは、まるで恋人をみる乙女のもの。敵に犯されている女の目ではなかった。

「フンツ、このスキモノ女侍め。仲間が呆れているぞ。所詮お前は牝。牡には敵わぬ憐れな存在だと思い知ったか。そらっ、どうだ、こうされて満足かつ、そらそらッ」

ゾクゾクゾクゾクウウウウ！

(んあん、詰られているのに、ああ、気持ちいいっ、胸がドキドキするうっ……！)

胸が甘美に粟立つ感覚は、触手に犯されていた時も感じていたが、今は比べものにならなかった。快感のあまり、乳房を揉むガラルの手を強く握りしめていた。

「あん、いいですっ、あはん、お、オツパイ出ちゃう、母乳、出るうッ」

次々命じられる台詞が、どんどん熱っぽさを増す。

老魔導師に聞いたのだから。母乳についても知っていたらしい。

煮え滾るように熱い乳房に、快美に満ちた切迫感が兆している。

揉まれれば揉まれるほど乳悦は濃厚になり、乳房の青筋が太くなっていく。乳頭の尖りようは緊張感たつぷりで、先ほど握っていた勃起ペニスのよう。ビクビクビクビク震えて止まらないのは、母乳が迸りそうになっているためか。

「ああ、はあはあ、イクッ、オマンコイキながら射乳して果てるう……ああ、イって果てちゃうううう！」

「イケ、そらイクんだリンコっ……俺に射乳を見せる、マンコでイキながら母乳出してもイケ、仲間が見てる前で、俺にイカされるんだ!」

ジユツブ~~~~~~~~!!

これまでにない強烈な突き込みをお見舞いされた。

陰唇とペニスの根本がギュウギュウ押し合い、恥蜜が周囲に飛散する。

子宮全体が揺さぶられる快感振動を覚えると同時に、リンコははしたなく叫んでいた。

ここまで派手に絶頂申告をしたことなど勿論初めて。それ故に新鮮で、負けていいなりになっている惨めさからくる被虐快美が際だって、

「ああ……はああ、はあっ、ンン、イクっ……ああ、イクううう~~~~~~~~!!」

背筋を反らして乳房を突きだした瞬間、ガラルの指の間から生えるように覗いていた

乳頭が、乳白色の液体を噴出する。飛沫はリアとソフィアを汚す。驚愕に目を見開いたふ

たりは、断続的に噴き出る母乳にまみれていく。

肉棒の深々と突き刺さった股間は、両隣の太股を巻き込んで痙攣している。ブジユウと
いう水音はなけなしの隙間から愛液が漏れ出た音だった。

(びび、ビクビクして、爆発しそう……はあはあ~~~~、もしや射精するのっ!)

子宮口を串刺しにしながら、絶頂の収縮で絞られ続けている肉棒が、ググツと総身を膨らませる。ガラルは小刻みに腰を使いだし、子宮口を連続的に突いてくる。

「おおっ、イクぞリンコっ……俺のザーメンを注入してやる。これから何度も注いで、

日たりとも俺のザーメンを受けないではいられない身体にしてやるからなあっ！」

ドクン！ ドクドクドクドクドクドク！

腰で女侍の裸の股間を持ち上げながら、ガラルは精液を放つ。

初めて『絶対斬姫』が男に射精された瞬間だ。

本当ならば絶対に交わるはずのない男の白濁粘液が、利己的な理由のために卑劣な手を使つて無辜の女侍を陥れた悪漢の穢れた樹液が、彼女の体内に自らの痕跡を刻み始めた刹那だ。

絶頂痙攣で膣全体を揺さぶりながら、子宮口に食い込む亀頭から放出した汁は、瞬く間に周囲を満たした。肉棒と膣の間に入り込み、膣ヒダの内部へと染み込んでいく。

「あひいいい……あ、ああああ……ひゅ、ひゅごいいれす……ガラルさまのチンポミルク、んひいん、ま、まらでへまふっ、イキマンコ、いっぱいれふうう……あひいんんん！」
濁液が体内を満たす感触は、ひたすら甘ったるい。

表面全部を膣ヒダに包まれている肉棒が、ドクンドクン脈動しながら精液を放出する度に、リンコが息の詰まる多幸福感を覚えた。触手に教えられた類の悦楽だが、濃度は段違い。ガラルに味わわされている方が遙かに心地いい。

絶対に許せないはずの男なのに、愛情めいた感情さえ湧いていて、今この瞬間が、（嫌ではない……ああ、それどころか、いい……み、見られているのに……私、ふたりに見られているのに……ああ、もっと見てリア、ソフィア、破廉恥な私をもっと見

て欲しいっ……見られると興奮するから……！)

ふたりを意識すると、迎合してはいけない男と仲良くセックスを楽しんでいる背徳感がかき立てられる。心臓がひっくり返りそうな位に弾み、もっとこの時間を続けたいとムラムラしてくる。

「いい子だリンコ。まだまだたっぷり犯してやる。もうお前は、俺の牝奴隷になる他ない牝なのだ」

ガラルの囁きを聞いた途端、また母乳が迸り、膣全体がキユウツと締まる。

(め、牝奴隷……奴隷にされるなど……ああ、でも……)

少し前なら、馬鹿にするなど、ありえないと嘲笑できたはずなのに。

今は、口にするどころか胸中でさえ断言することのできない女侍であった。

この体験版はここまでとなります。続きは製品版でお楽しみ下さいませ。
ご鑑賞いただき誠にありがとうございました。

「ご挨拶」

この度は、ご購入くださいますして誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。
この他に違いはございません。

一部の体験版は分量が製品版の半分程度です。

「ご注意ください」

- ・ P D F 閲覧ソフト (Adobe Reader 7、9 ~ 11 で確認済み)
によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・ 本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G・J?様)と、
「七人のオンラインゲーマーズ」(G・J?様)
を利用して作成しました。

尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

「ご意見、ご感想をいただけましたら幸いです」

(2013年6末日現在)

- ・ 夜山の休憩所のブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>
- ・ 夜山の休憩所のBlog <http://b.dlsite.net/RG11385/>